

教育目標 「豊かな心で たくましく 自分の人生を切り拓く 生徒」

重点目標 「豊かな心 確かな学力 健やかな身体」



あ さ ひ こ
朝 日 子

佐渡市立畑野中学校 学校だより

平成29年 9月5日(火) 第9号

著・編 校長 加藤雄一郎 (TEL 66-2058)

創立当初を振り返る、70周年に添えて

今年度、畑野中学校は創立70周年を迎え、体育祭や文化祭には「創立70周年記念」の冠を付けて実施します。そこで、一気に70年を振り返ることはできないので、第1弾として創立当初から25年間を振り返っています。

1 創立当時を振り返る

創立は昭和22年（1947年）5月、いわゆる学制（学校の制度）が変わって、国民学校から新制中学校になりました。この70年前は日本はどんな状況で、どんな畑野中だったでしょう？想像してみてください。1つヒントを出します。日本が太平洋戦争に負けた終戦が昭和20年（1945年）でしたから、戦後2年目ということになります。

「当時は新制中学校に切り替わったとはいえ、同じ校舎で新しい学校になった感じはなかった。」とのこと（第1・2回卒業生）。校章や校歌ができ、新しい教科の英語がこの時から始まり、クラブ活動もできました。そして、小学校と渡り廊下で結ぶ校舎が4年後完成しています。体育館ができるまでにはもう3年かかっています。その頃の様子「創立50周年記念誌」に、次のようにあります。

「やはり戦後で、混乱した時代であり、物は足りない、お金もない。お金を借りることもできず、学区内の各家庭から相当の寄付をお願いして、学校を建てたのでありました。父兄の皆さんが学校のためなら、子供たちのためならと歯を食いしばってお金を出してくださったのでありました。畑野の中学校だけでなく、日本中の中学校がそうした父兄や地域の方々の汗の結晶で建てられたのです。教育というものは、食べることを我慢しても、着ることを忍んでも優先させなければならないほど大切なことであるという理解があったからであります。」戦後の日本を復興させるために、教育の大切さを国民が理解し、若者に託した時代でした。

2 卒業生の思い出の作文から

また、卒業生の作文（「50周年記念誌」）からいくつか紹介します。

- ① 「食料不足の深刻な時で、学校で実習畑、実習田があり多くの作業の時間があった。畑の肥料はしもごえ（いわゆる肥し）で学校の便所から運んだ。この「田舎の香水」には慣れていたが、桶が揺れるためにこぼれてともすると足や服について教室の中まで匂いを持ち込んだ。でも作業の合間に腰を下ろして、青空の下で先生といろいろな雑談を交わし、悩み事等も聞いてもらえる楽しい時間でもあった。」（第2回卒業生）その頃も、生徒と先生方の関係が良かったことが分かります。
- ② 昭和32年には次のように載っています。『学校で勉強、家に帰れば百姓の手伝い』が子どもたちの生活だった。」（第10回卒業生）農家が多かったのも、当然子供たちは家の手伝いをして、家族みんなで協力していたことが分かります。皆さんは「学校では勉強、家では何を手伝っていますか？」
- ③ 「1クラス50余名のマンモス世帯、（創立当初、全校生徒は409名、一番多かった時は578名（昭和36年））一度着席すると、起立するのに一苦労でした。忘れ物、規則等々守れない生徒は、先生方の個性あるユニークな罰が待っていました。お陰様でみんな逞しく忍耐ある人間が形成されたものと思います。
3年生の体育祭は、紺の着物に袴、木刀を脇差しに『白虎隊』を披露、次々と走馬燈のように思い出されます。（中略）今後もよく学び明るく楽しい学校生活が過ごせる畑野中でありたいことを願っています。」（第10回卒業生）
- ④ 「戦後10年足らずの頃で、全国的にもまだまだ物資の乏しい時代だったので、建物に見合うような体育用具はなく、体育の時間にはもっぱら球1つで用の足るドッジボールやバレーボールを選ぶことが多かったような気がする。その代わりとは言っては何だが、現在の中学校生活に付き物のような陰湿なイジメや登校拒否とはまったく無縁の環境のもとで、文字通り『良き師、良き友』に恵まれ、実り多い3年間を過ごすことができた。」（第9回卒業生）
- ⑤ 「優しく小学校を見守るように建っていた校舎がまぶたに浮かぶ。（中略）豊かな自然と子供たちを慈しむ地域の人々の愛に育まれた幸福な少女時代の記憶は、心の中でさんぜん燦然と輝いている。私の終生の宝

